

子どもを支援していくときに、支援の方法のみを考えていても、的確な支援は行えません。その子どもをどう理解するのかというアセスメントを適切に行うことが必要になってきます。

学校生活を通して子どもを支援していくためには、学校心理学の枠組みが役立ちます。学校心理学では、子どものアセスメントは「心理教育的アセスメント」と呼ばれ、「子どもの問題状況についての情報を収集し、分析して、援助介入に関する意思決定を行う資料を提供するプロセスである」（石隈、一九九九）と定義されています。そして、アセスメントの方法としては、子どもおよび関係者との面接、心理検査、行動観察、記録書類の検討の四種類が挙げられます。アセスメントという言葉からは、心理検査を連想する場合が多いかもしれませんが、アセスメントの方法は心理検査だけではないのです。心理検査はアセスメントのための非常に強力なツールですが、一つのツールにすぎません。四種類の方法を組み合わせながら、子どものアセスメントを適切に行うことが求められます。

ところで、学校は、子どもたちの生活の場です。授業中の様子、先生や友達とかわかっている様子、生活場面での様子などを直接的に観察することができます。これらを観察して得られた情報は、アセスメントのための非常に有用な情報となります。子どもの学習の成果（ノートや作品、テスト結果など）も、アセスメントのための有用な情報です。また、保護者や担任の先生方などからも、子どもについての情報を得られやすいと思います。そうしたものも、状況に応じて、心理検査や面接での聞き取りとあわせてアセスメントに活用していくことが求められます。

学校は、多くの人がかかわり合いながら過ごす生活の場です。子どもへの指導や支援も、基本

小さな工夫 1

行動観察を効果的に行う三つのポイント

的には生活の中において行われます。同様に、アセスメントも毎日の学校生活を進めていく中で行うことが求められます。よほどの事情がない限り、学校生活よりもアセスメントを優先させてそれに集中するということは行いにくいのです。つまり、学校生活そのもの、そして指導や支援と同時並行的にアセスメントを行っていくのが基本になると言えます。そして、さらなる必要性がある場合に、個別式の知能検査などのアセスメントが行われます。

こういった学校の特徴を活かして、学校現場に合ったアセスメントを工夫することが重要です。

教室にいる子どもの様子を観察することも、アセスメントの方法としては有効です。その際、子どもの行動観察を効果的に行うための、三つのポイントをご紹介します。

一つ目は、観察対象の子どもだけではなく、多くの子どもの様子を観察することです。ある子どもだけに目を向けていると、その子ども自身に気づかれてしまいます。子どもは警戒し、いつもの自然な行動ではなくなる可能性があります。そうすると、観察によって得られた情報をどのように意味づけていくのが難しくなってしまうのです。

また、多くの子どもを観察することによって、その教室での子どもたちの行動パターンを知ることができます。それぞれのクラスには、それぞれの文化や習慣があります。対象の子どもだけ